

③ 黒島地区ってこんなまちです

(黒島地区の紹介)

本島は、相浦港から西方約13kmの洋上に位置します。

208の島々からなる九十九島の中で最も大きな島であり、周囲約13km、面積約5.4km²の規模を有します。

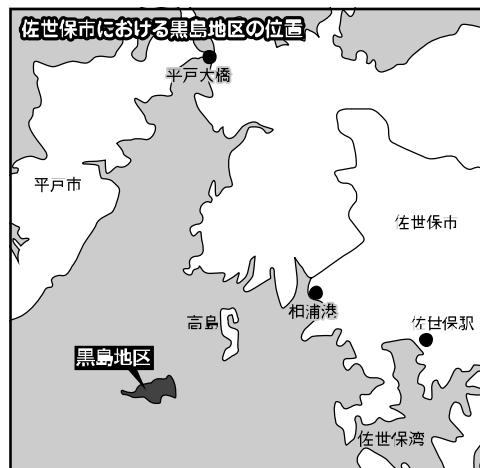
人口は586人、294世帯(平成19年10月現在)、産業は漁業、農業、畜産業の他、石材加工業などがあります。

カトリック信仰の島として知られ、島の人口の約70%が信徒です。

主な施設は、佐世保市役所黒島支所、黒島地区公民館、黒島小学校、黒島中学校、黒島郵便局、相浦漁業協同組合黒島支所、ながさき西海農協相浦支店黒島事業所、黒島保育所、黒島デイサービスセンター、その他にも、民宿旅館2軒、小売店6店(食料・雑貨・日用品等)があります。

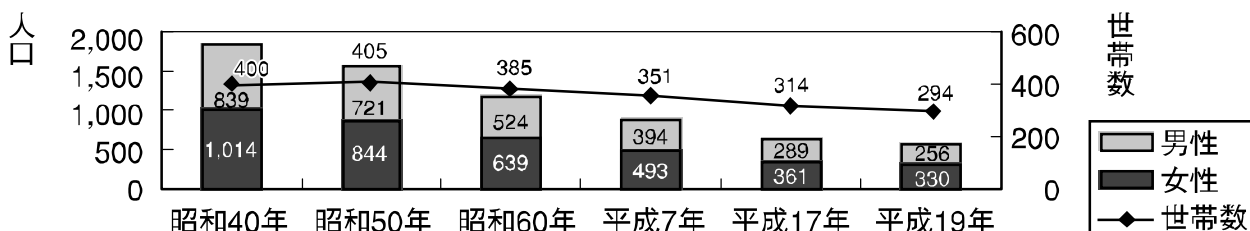
交通は、本島までの定期便「ニューフェリーくろしま」が相浦～黒島間(高島経由)を約50分で1日3往復、また、不定期貨物フェリー「睦丸」も運行しています。

黒島天主堂や串ノ浜岩脈、根谷の大サザンカ、その他にも、信仰復活の地、修道院、興禅寺、女瀬の鼻などたくさんの名所旧跡があり、観光客の来島も年々増加しております。



〔黒島天主堂〕

(黒島地区の人口推移) ※いずれも10月1日時点の統計資料



〈 黒島地区“わがまち自慢” 〉

黒島地区には“自慢”がいっぱい! その一部を紹介します。

◎黒島天主堂◎

フランス人・マルマン神父の設計と指導により、信徒の献金と勤労奉仕で、明治35年に完成した煉瓦一部木造教会堂です。

煉瓦造りでは長崎県で4番目に古い建物で、ロマネスク様式の外観は質素ですが、内部は充実した3層構造になっています。煉瓦は約40万個使用されており、一部は島の赤土を焼いたものです。また、祭壇の床には、1899年に大量生産が始まった有田磁器タイルが敷かれています。

マルマン神父手作りの説教壇をはじめ、スタンドグラスや聖人像、今でも朝夕、島内に鳴り響くアンゼラスの鐘の音は、100余年の歴史を刻んでいます。

平成10年5月1日、国の重要文化財に指定されました。

◎串ノ浜岩脈◎

黒島の西岸にある串ノ浜岩脈は、約800万年前に大きな地殻変動が起こり、深月層の裂け目に入り込んだ溶岩が冷え固まり、長い年月の海水の浸食で柔らかい部分が除かれ、固い溶岩部分が残ったものです。

岩脈は平均幅が2mあり、東・中央・西の3列があります。東列は120m、中央列は55m、西列は目で確認できるのが100mで、先端は海に没しています。

長崎県内で最大の岩脈で、地殻の変動を物語る絶好の資料です。
平成10年2月18日、県の天然記念物に指定されました。



◎根谷の大サザンカ◎

1800年頃、西彼杵半島の外海地方から黒島に移住してきた橋本氏が、一緒に持って来た木を屋敷の境に移植したといわれています。

実から採れた油は貴重品で、天ぷらなどに使用し、当時の生活を支えたのではないかと考えられます。

推定樹齢が250年から350年以上の巨木で、長崎県北地域で最大規模を誇ります。根回り4m、幹回り1.8m、樹高約10mで、今でも11月頃から一重の白い花が咲きます。

平成9年11月28日、佐世保市の天然記念物に指定され、島の自然と歴史を示す名木です。



◎黒島豆腐・ふくれまんじゅう◎

黒島の名物「黒島豆腐」は、海水を使用して作り、石のように硬いのが特徴です。また、「ふくれまんじゅう」も豆腐に劣らぬ逸品で、イーストで膨らませ、かからの葉に置いて蒸します。中に入れるあんには小豆や、収穫時にはえんどう豆も使用します。

どちらも地域の行事にはかかせない品で、婦人会の皆さんが寄り合って作ります。

個人の家の子事・仏事でもテーブルの上を飾る郷土料理の代表であり、次の世代へと引継がれていくことを願います。



◎黒島石◎

黒島石は花崗岩で、通称「黒島みかげ」と呼ばれ、島の宝物ともいえます。

昔は、運搬が大変だったこともあり、海岸近くを掘り出していました。

今では、道の整備やフェリーの運航により運搬が楽になり、重機の使用によって生産量も多くなりました。

黒島石は墓石・記念碑・鳥居・柱石・表札等に加工され、県下一円に出荷されており、長崎県で産出されている石のひとつです。

